

和泉葛城山の昆虫（2021-2022 年調査）

岩崎 拓

CB 大阪 : 〒590-0143 大阪府堺市南区新樟尾台 3 丁 1-3-504

Insects around the top of Mt. Izumikatsuragi, recorded in 2021-2022

Taku IWASAKI

CB-Osaka : 3-1-3-504 Shinhinoodai, Minami, Sakai, Osaka 590-0143, Japan

Abstract : Successive surveys were conducted to describe the insect fauna and its change around the top of Mt. Izumikatsuragi (lat. 34.347989N, long. 135.434352E, alt. 858m) from 2008, and the results obtained in 2021-2022 were reported in this paper. The survey area located in Kongo Ikoma Kisen Quasi-National Park (Osaka and Wakayama Prefectures), and included forests of the Japanese beech, *Fagus crenata*. Insects observed or recognized by singing were recorded in a certain route of ca. 3-hour daytime walk, once a month from April to December in 2009-2022, after a preliminary survey in 2008. Over 200 species, including residents only in the forests were identified in both years. Numbers of the threatened species selected in the Osaka Prefecture Red List were 9 and 7, found in 2021 and 2022, respectively. Out of these red list species, the acridid *Mongolotettix japonicus*, the cicadas *Yezoterpnosia vacua* and *Lyristes japonicus* were found every year, whereas the katidid *Psyrana japonica* was the first time in 2021. Mountain-dwelling species as well as those threatened ones, and the number of species in each order or subgroup were summarized below. For example, 25 and 27 species of butterflies were observed in 2021 and 2022, respectively, and the two values were near to the average one (26.4 species) for 2009-2022. Populations of some mountain-dwelling species and threatened ones tended to be decreasing, and some plain-dwelling species were beginning to be found. In order to assess such trends to continue, in addition to the first stated objectives, further surveys should be conducted.

Key words : insect, fauna, threatened species, Mt.Izumikatsuragi

はじめに

国の天然記念物に指定されたブナ林を含む和泉葛城山の山頂付近の昆虫相を明らかにするため、2008 年に予備的な調査を開始し、2009 年以降は 4 月から 12 月まで毎月 1 回の割合で定期的な調査を行ってきた。これまでに確認された大阪府レッドリスト（大阪府、2014）に選定された昆虫は 29 種を数える（岩崎、2024）。その他にも、貝塚市内において和泉葛城山の山頂付近でしか確認され

ていない種は多く、貝塚市の昆虫相を豊かにしている地域であると言える。2021-2022 年も引き続き、昆虫相全般を対象にした調査を行ったので、ここに報告する。

調査方法

2021 年と 2022 年の 4 月から 12 月にかけて、毎月 1 回、雨でない日を選んで調査を行った。和泉葛城山の山頂付近（標高 820～858m：メッシュコード 51354314-15：図 1、2）を約 3 時間かけて歩き、目視あるいは鳴き声等によって種の確認を行った。調査エリアは金剛生駒紀泉国定公園内にあり、調査ルートは大阪府貝塚市と岸和田市、および和歌山県紀の川市にまたがる。なお、2022 年 11 月と 12 月は登山道 A コースが通行止めになっていたため、調査ルートを短縮した。

目視で同定可能な種は記録するか写真撮影に留め、同定が困難な種や貝塚市立自然遊学館（以下、自然遊学館）に標本のない種等を採集し、自然遊学館の所蔵標本とした。

今回の調査結果の一部は、自然遊学館の季刊誌である「自然遊学館だより」において調査速報として報告済みであるが（岩崎、2022、2023）、公表後に同定できた種があり、大阪府レッドリスト種に関する誤りがあったので、本稿において訂正した。

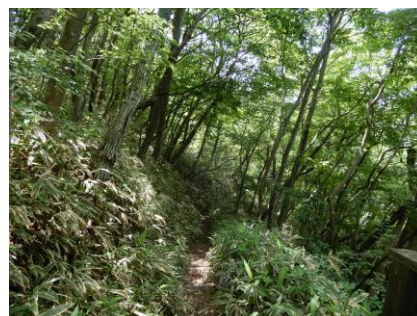


図 1. 山頂付近の登山道 2021. 6. 8



図 2. 山頂付近の登山道 2021. 11. 4

結果および考察

2021 年と 2022 年の調査で確認された昆虫を、大阪府レッドリスト種、貝塚市内での分布が和泉葛城山の山頂付近にほぼ限られる山地性の種、自然遊学館に標本がなかった種や、増加傾向にある平地にも生息する種などに関して、それぞれの目ごとに解説を行った。また、必要に応じて、自然遊学館がこれまでに収集・所蔵してきた貝塚市産昆虫標本のデータとの比較を行った。本文中の表記では、年月のみを使用した。各月の調査日（および学名）に関しては、表 1～8、および巻末に掲載した各調査日の調査速報を、大阪府レッドリストのランクに関しては、表 9 を参照いただきたい。

トンボ目

大阪府レッドリスト種として 2 年間に確認したのはオツネントンボとミヤマアカネの 2 種である。オツネントンボは 2021 年 12 月に 1 ♀を確認した。ミヤマアカネは 2015 年以降、8 年連続で確認されている。通常、確認は夏期であり、2021 年 8 月に 2 ♀、2022 年 8 月に 1♂1♀を確認したが、2022 年には 10 月にも 1 ♀を確認した（図 3）。10 月の確認は、2008 年の調査



図 3. ミヤマアカネ
2022. 10. 3

開始以降、初めてのことである。その他、平地や丘陵地の普通種以外の種として、コオニヤンマが2022年7月に確認されたことを書き留めておく。

バッタ目

大阪府レッドリスト種としては、ナキイナゴ（図4）、ヒトコブササキリモドキ（図5）、ヘリグロツユムシ（図6）の3種を確認した（表1、2）。ナキイナゴは2008年の調査開始以来、16年連続の確認である。2020年の調査で連続年の確認が途切れたヒトコブササキリモドキは、2021年と2022年ともに確認され一安心であるが、2021年7月が1♂1♀、2022年8月が1♀と、確認個体数は少なかった。2021年8月に確認されたヘリグロツユムシは、2008年の調査開始以降、初めての確認である。ただし、2014年の大阪府レッドリスト改定時に「情報不足」とされていたことを知らず、自然遊学館だより（と調査速報）では、単に注目種として扱ってしまった（岩崎、2022）。



図4. ナキイナゴ幼虫
2021. 6. 8



図5. ヒトコブササキリモドキ
2021. 7. 22



図6. ヘリグロツユムシ
2021. 8. 24

表1. 和泉葛城山山頂付近において2021年4月から12月にかけて確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 15日	5月 14日	6月 8日	7月 22日	8月 24日	9月 10日	10月 7日	11月 4日	12月 3日
カマドウマ科	チビクチキウマ	<i>Anoplophilus minor</i>				○		○				
コロギス科	ハネナシコロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i>							○			
キリギリス科	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>		△	△		○	○				
	ヒメギス	<i>Eobiana engelhardti subtropica</i>			△			○				
ササキリモドキ科	ヒトコブササキリモドキ	<i>Tettigoniopsis kongozanensis</i>					○					
ツユムシ科	ヤマクダマキモドキ	<i>Holochlora longifissa</i>						○				
	ホソクビツユムシ	<i>Shirakisotima japonica</i>					○	○	○			
	ヘリグロツユムシ	<i>Psyrana japonica</i>						○				
	アシグロツユムシ	<i>Phaneroptera nigroantennata</i>							○			
コオロギ科	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>								○	○	
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hivinonis</i>								○		
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Sivistella bifasciata</i>							○	○	○	
	マダラスズ	<i>Pteronemobius nigrofasciatus</i>								○	○	○
ヒシバッタ科	モリヒシバッタ	<i>Tetrix silvicultrix</i>								○		
バッタ科	ヤマトフキバッタ	<i>Parapodisma yamato</i>			△	△	△			○	○	
	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>						△			○	
	ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>				△○	○					
	ツマグロバッタ	<i>Stethophyma magister</i>					○	○	○			
	ヒロバネヒナバッタ	<i>Stenobothrus fumatus</i>						○		○	○	○

表2. 和泉葛城山山頂付近において2022年4月から12月にかけて確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 7日	5月 19日	6月 9日	7月 7日	8月 5日	9月 12日	10月 3日	11月 4日	12月 3日
カマドウマ科	チビクチキウマ	<i>Anoplophilus minor</i>						○				
	ハヤシウマ	<i>Diestrammena itodo</i>						△				
コロギス科	コロギス	<i>Prosopogryllacris japonica</i>						○				
キリギリス科	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>							○			
	ヒメギス	<i>Eobiana engelhardti subtropica</i>								○		
ササキリモドキ科	ヒトコブササキリモドキ	<i>Tettigoniopsis kongozanensis</i>						○				
	ヒメツユムシ	<i>Leptotetura albicornis</i>							○			
コオロギ科	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							○	○	○	○
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hivinonis</i>							○	○		
	カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>							○			
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Sivistella bifasciata</i>							○	○	○	
	マダラスズ	<i>Pteronemobius nigrofasciatus</i>				○	○	○	○	○	○	○
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>								○		
ヒシバッタ科 バッタ科	モリシバッタ	<i>Tetrix silvicultrix</i>									○	
	ヤマトフキバッタ	<i>Parapodisma yamato</i>		△	△	△						
	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>								△		
	ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>			○	○						
	ツマグロバッタ	<i>Stethophyma magister</i>						○	○			
	ヒロバネヒナバッタ	<i>Stenobothrus fumatus</i>					○		○	○	○	○

2019年-2020年の報告書（岩崎、2024）で書いたアシグロツユムシの顕著な減少であるが、2021年も1個体の確認に留まり、種間関係にも注意すべきとしたホソクビツユムシは2021年の7月と8月ともに10個体以上を確認した。ただし、2022年はツユムシ科全体で確認がゼロであったので、ツユムシ科全体の減少としてとらえるべきか、考察は振り出しに戻ってしまった。また、同報告書で書いたアオマツムシに関しては、2021年の鳴き声の数が少なくなり、2022年は9月と10月に1個体ずつの鳴き声を聞いただけである。

ヒメツユムシも、2008年に調査を開始したころは山頂付近の「普通種」だと認識していたものである。ササキリモドキ科もツユムシ科と同じく、科全体として減少傾向にあるのかもしれない。2022年9月の確認は2017以来5年ぶりであった。バッタ目の項の最後として、速報に画像を掲載できなかったコロギスを図7に示す。木柵にいたもので、樹上のスウィーピングをしていないので、確認個体数が少ないという可能性がある。



図7. コロギス
2022. 8. 5

カマキリ目など

カマキリ目に関しては、2008年から2020年まではオオカマキリしか確認してこなかった。前回の報告書では「個体数が増加傾向にある」と記したが、2017年を境に個体数が増加したという認識の方が正しいかもしれない。2009年から2016年までの8年間の平均個体数（幼虫+成虫）が3.5、最多が5であったのに対して、2017年から2022年までの6年間の平均個体数は11.7、最多は18であった（2021年は17個体、2022年は10個体：2008年は年4回の予備調査だったので、平均値の計



図8. ヒメカマキリ
2019. 6. 6

算から省いた)。また、2022 年 11 月に初めてヒメカマキリのメス成虫を 1 個体確認した (図 8)。

ナナフシ目では、エダナナフシの成虫を 2021 年の 9 月と 10 月に確認し、シロアリ目では、ヤマトシロアリのコロニーを 2021 年 8 月に確認した。

カメムシ目

セミ科は、2021 年、2022 年とも同じ 6 種を確認した (表 3、4)。大阪府レッドリスト種であるエゾゼミとハルゼミは、2008 年の調査開始以降、毎年確認されている。ハルゼミの鳴き声での確認は、2021 年 5 月が約 20 個体、6 月が 8 個体、2022 年は、5 月 12 個体、6 月 11 個体、7 月 2 個体であった。2016 年に確認されたクマゼミは 6 年連続で確認されなかった。2012 年から 2019 年まで連続して確認されていたアブラゼミは 3 年連続で確認されていない。

表3. 和泉葛城山山頂付近において2021年4月から12月にかけて確認されたセミ科

「○」印は、鳴き声・目視での確認を示す。

種	学名	調査日	4月 15日	5月 14日	6月 8日	7月 22日	8月 24日	9月 10日	10月 7日	11月 4日	12月 3日
エゾゼミ	<i>Lyrstes japonicus</i>					○	○	○	○		
ミンミンゼミ	<i>Oncotympana maculaticollis</i>						○	○			
ニイニイゼミ	<i>Platyleura kaempferi</i>					○					
ハルゼミ	<i>Yezoterpnosia vacua</i>			○	○						
ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>						○	○			
ヒグラシ	<i>Tanna japonensis</i>					○					

表4. 和泉葛城山山頂付近において2022年4月から12月にかけて確認されたセミ科

「○」印は、鳴き声・目視での確認を示す。

種	学名	調査日	4月 7日	5月 19日	6月 9日	7月 7日	8月 5日	9月 12日	10月 3日	11月 4日	12月 3日
エゾゼミ	<i>Lyrstes japonicus</i>					○	○	○			
ミンミンゼミ	<i>Oncotympana maculaticollis</i>						○				
ニイニイゼミ	<i>Platyleura kaempferi</i>					○	○				
ハルゼミ	<i>Yezoterpnosia vacua</i>			○	○	○					
ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>						○	○			
ヒグラシ	<i>Tanna japonensis</i>						○				

2021 年と 2022 年に確認した主なカメムシ亜科のリストを、それぞれ表 5 と表 6 に示した。これまで山頂付近での普通種と考えていたツマジロカメムシやトゲカメムシでさえ、確認するのに苦労するようになった感がある。山地性のカメムシ科として注目してきたトホシカメムシは、2020 年まではほぼ毎年確認されていたが、今回の調査では確認されなかった。また、同じく山地性のツノアオカメムシとエゾアオカメムシは、2018 年が最後の確認年となっている (表 10 参照)。

表5. 和泉葛城山山頂付近において2021年4月から12月にかけて確認された主なカメムシ亜目
「△」印は幼虫、「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 15日	5月 14日	6月 8日	7月 22日	8月 24日	9月 10日	10月 7日	11月 4日	12月 3日
ツノカメムシ科	セアカツノカメムシ	<i>Acanthosoma denticaudum</i>								○	○	
	ヒメツノカメムシ	<i>Elasmucha putoni</i>			○							
クヌギカメムシ科	クヌギカメムシ	<i>Urostylis westwoodi</i>				○						
	ナシカメムシ	<i>Urochela luteovaria</i>						○				
カメムシ科	クサギカメムシ	<i>Halyomorpha picus</i>										△
	トゲカメムシ	<i>Carbula humerigera</i>						○				
	チャバネアオカメムシ	<i>Plautia crossota stali</i>										○
	ツマジロカメムシ	<i>Menida violacea</i>								△	△	

表6. 和泉葛城山山頂付近において2022年4月から12月にかけて確認された主なカメムシ亜目
「△」印は幼虫、「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 7日	5月 19日	6月 9日	7月 7日	8月 5日	9月 12日	10月 3日	11月 4日	12月 3日
ツノカメムシ科	セアカツノカメムシ	<i>Acanthosoma denticaudum</i>			○	○	○		△	○	○	
	ハサミツノカメムシ	<i>Acanthosoma labiduroides</i>									○	
	ヒメツノカメムシ	<i>Elasmucha putoni</i>						○				
クヌギカメムシ科	クヌギカメムシ属	<i>Urostylis</i> sp.										○
	ナシカメムシ	<i>Urochela luteovaria</i>					○					
カメムシ科	クサギカメムシ	<i>Halyomorpha picus</i>			○	○					○	
	トゲカメムシ	<i>Carbula humerigera</i>			△				○			
	チャバネアオカメムシ	<i>Plautia crossota stali</i>					○	○				
	シモフリクテブトカメムシ	<i>Eocanthecoma japonicola</i>									○	

2019年7月に初めて確認されたモンキクロカスミカメは、2021年6月に1個体が確認された。2022年9月に確認されたマツヒラタナガカメムシは、自然遊学館に標本がなかったが、平地にも分布する種である（図9）。

チャバネアオカメムシは、以前は毎年見られる種ではなく、確認年でもせいぜい1個体であったが、2017年以降は6年連続で確認され、個体数の増加パターンがオオカマキリに似ているのかもしれない。



図9. マツヒラタナガカメムシ
2022. 9. 12

コウチュウ目

大阪府レッドリスト種としては、セダカテントウダマシを2021年4月と2022年6月に、それぞれ1個体を確認した。セダカテントウダマシの成虫を確認した月は、2008年以降、4月と6月が3回、7月と9月が2回となっている。

2021年7月に確認されたミヤマクワガタは、昼間から樹液を吸っていたオス成虫であり、2012年以降の確認となったが（表10参照）、昼間の目視中心の調査では、精度が限られてしまうのだろう。同表で2013年が最後の確認年となっているアカアシクワガタも、山頂付近で調査をされている他の方からは生息情報を頂いている。

ただし、一例として山地性のテントウムシであるシロホシテントウをあげると、2009年や2010年には年に2～3回の調査日で確認されていたのに、それ以降、年1回の確認年の間隔が空いていき、2017年が最後の確認年になっているような場合は、減少傾向にあると推測できる。

2021 年 7 月にモミジカラスウリ上で確認されたトホシテントウは、2008 年以降の調査開始以降、記録されていなかった種である（図 10）。自然遊学館には、本種の貝塚市蕎原産 2 個体が所蔵されていて、それぞれ標高約 220m と 450m 地点で採集されたものである。



図 10. トホシテントウ
2021. 7. 22



図 11. ホソトラカミキリ
2021. 7. 22



図 12. キマダラヒゲナガソウムシ
2022. 7. 7

カミキリムシ科に関しては、2021 年 7 月に確認されたホソトラカミキリ（図 11）、および 2021 年 8 月に確認されたマルバネコブヒゲカミキリが自然遊学館に標本がない種であった。ただし、これまでの山頂での報告も含めて「自然遊学館に標本がないカミキリムシ科」と書いていても、佐々木仁氏が作成した『和泉葛城山山頂周辺のカミキリムシ』という目録には掲載済みの種である（佐々木、2024、92 種がリストアップされている）。その他、自然遊学館に標本がない種としては、2022 年 7 月に確認されたキマダラヒゲナガソウムシがあげられる。

ハエ目

2022 年 8 月に確認されたヒメキンムシヒキは、自然遊学館に標本がない種であった。サップロアシナガムシヒキは、2008 年以降の調査では初めて確認したが、自然遊学館に蕎原東手川産（2007 年、標高約 415m）の標本が所蔵されている。図 13 に速報に掲載できなかったカオグロオビホソヒラタアブの画像を示した。2022 年 10 月にオオカマキリのメス成虫にヤドリバエ科の卵が付着しているのを初めて確認した。



図 13. カオグロオビホソヒラタアブ
2022. 6. 9

チョウ目

年 9 回の調査を開始した 2009 年以降の 14 年間に於いて、チョウ類の確認種数の平均値は 26.4 種であり（最少は 2010 年の 22 種、最多は 2016 年と 2019 年の 31 種）、2021 年の 25 種と 2022 年の 27 種は平均的な種数であると言える（表 7、8）。両年における大阪府レッドリスト種の確認は、2021 年 7 月のホソバセセリだけであった（図 14、表 7、9）。



図 14. ホソバセセリ
2021. 7. 22

表7. 和泉葛城山山頂付近において2021年4月から12月にかけて確認されたチョウ類

「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 15日	5月 14日	6月 8日	7月 22日	8月 24日	9月 10日	10月 7日	11月 4日	12月 3日
アゲハチョウ科	キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>							○	○		
	オナガアゲハ	<i>Papilio macilentus</i>				○		○				
	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus</i>							○			
	ジャコウアゲハ	<i>Byasa alcinous alcinous</i>				○						
シロチョウ科	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i>				○	○	○	○			
	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina mandarina</i>				○	○	○	○	○		
タテハチョウ科	クロヒカゲ	<i>Lethe diana diana</i>			○	○	○	○	○	○		
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>							○			
	サカハチチョウ	<i>Araschnia burejana</i>					○	○				
	コムシジ	<i>Neptis sappho intermedia</i>				○	○	○				
	アサマイチモンジ	<i>Limenitis glorifica</i>							○			
	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>							○	○		
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i>								○		
	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia</i>					○		○	○		
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>				○	○	○	○	○		
	アサギマダラ	<i>Parantica sita nipponica</i>				○			○	○		
	テングチョウ	<i>Libythea celtis celtoides</i>			○	○	○					○
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i>			○						○	○
	ウラナシジミ	<i>Lampides boeticus</i>								○		
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>				○	○					
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>						○	○			
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>								○		
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>				○		○				
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus flavus</i>					○	○				
	ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus</i>					○					

* 6月8日のテングチョウは、300個体以上の群飛を確認

表8. 和泉葛城山山頂付近において2022年4月から12月にかけて確認されたチョウ類

「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	調査日	4月 7日	5月 19日	6月 9日	7月 7日	8月 5日	9月 12日	10月 3日	11月 4日	12月 3日
アゲハチョウ科	オナガアゲハ	<i>Papilio macilentus</i>			○	○						
	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus</i>			○							
	ジャコウアゲハ	<i>Byasa alcinous alcinous</i>			○							
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>				○						
シロチョウ科	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i>			○	○	○	○	○			
	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina mandarina</i>		○				○	○	○		
タテハチョウ科	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>				○						
	コジャノメ	<i>Mycalesis francisca</i>				○						
	クロヒカゲ	<i>Lethe diana diana</i>			○	○		○				
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>					○	○	○			
	サカハチチョウ	<i>Araschnia burejana</i>			○				○			
	コムシジ	<i>Neptis sappho intermedia</i>				○		○		○		
	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i>		○								
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i>		○								
	ルリタテハ	<i>Kaniska canace</i>		○								
	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia</i>					○	○	○	○		
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>			○							
	アサギマダラ	<i>Parantica sita nipponica</i>					○		○	○		
	テングチョウ	<i>Libythea celtis celtoides</i>		○	○	○*	○					○
	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>				○	○	○				
シジミチョウ科	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i>			○			○				
	ウラナシジミ	<i>Lampides boeticus</i>								○	○	
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>							○			
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>					○	○				
セセリチョウ科	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>								○		
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>						○				
	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i>				○		○				

* 6月9日のテングチョウは、100個体以上の群飛を確認

ジャコウアゲハは、2008年から2014年までは確認されず、2015年以降は2022年まで9年連続で確認されている。原因は不明であるが、調査地周辺で食草が成長・定着したのかもしれない。テングチョウの6月の群飛に関しては、2021年が300個体以上、2022年が100個体以上であった。2022年の

6 月は、1 箇所に集中するだけではなく、調査ルート他の場所にも分散していて、合計では 150 個体以上であった。注目種にあげているアサギマダラは 2008 年以降毎年、ヒオドシチョウも 2021 年のように欠ける年はあるものの、ほぼ毎年確認されている（表 10 参照）。ただし、ヒオドシチョウの場合、ほとんどが 1 調査日に 1 個体であり、まれにその占有オスに絡む別のオスを見る程度である。

ガ類に関しては、昼行性の種の確認が主で、キンモンガが毎年一番多く見られ、2021 年と 2022 年とも、3 回の調査日で確認されている。また、ホシホウジャクとクロホウジャクが、秋にアカタテハやアサギマダラに混じって、ヨシノアザミやヒヨドリバナで吸蜜している様子も毎年のことである。その他、調査速報で紹介できなかったガ類の画像を図 14 と図 15 に示した。ウスベリケンモンは自然遊学館に標本がない種で、コフタオビシャチホコは 2010 年以来の確認となった。



図 14. ウスベリケンモン
2022. 6. 9



図 15. コフタオビシャチホコ
2022. 8. 5



図 16. クロモンドクガ幼虫
2022. 6. 8

ガ類の幼虫では、シャクガ科、ドクガ科、ヒトリガ科を多く見かけるものの、他の科を含めて、同定できない種が大半である。ドクガ科では、ドクガやゴマフリドクガの幼虫、ヒトリガ科ではクワゴマダラヒトリとヨツボシホソバの幼虫を見る機会が多い。クロモンドクガの幼虫（図 16）を確認したのは今回が初めてであるが、成虫の標本は自然遊学館に 1999 年の当地産のものが 1 個体所蔵されている。

ハチ目

2021 年 5 月に確認したオオコシアカハバチは 2009 年以来の確認となった。同じく 2021 年 5 月に確認したオナガバチ亜科（ヒメバチ科）のメス成虫は、オオホシオナガバチに似るが、体部の黄斑の配置が微妙に異なるので、同定できていない。2021 年 9 月に確認したムネアカアリバチは自然遊学館に標本がない種であった。

注目種にあげているシダクロスズメバチは、2021 年 5 月と 12 月、2022 年 12 月に確認した。12 月の確認場所は両年で同じであった。スズメバチ科では、キロスズメバチの確認日が最多で、オオスズメバチより多く、その他、ホソアシナガバチを含めて 4 種が両年ともに確認された種である。

アリ科では、シワクシケアリ、ムネアカオオアリ、クロオオアリが春から秋まで、木柵上でよく見かける種である。

その他の目

チャタテムシ目はスジチャタテだけで、2021年9月、2022年7月とも、幼虫の集団を確認した。アミメカゲロウ目は目視で同定できる種は少ないが、ラクダムシを2021年6月にアカマツ林近くの草上で1個体確認した。シリアゲムシ目に関しては、毎年確認されてきたヤマトシリアゲ以外では、2022年5月にホソマダラシリアゲを確認しただけであった（スジチャタテの幼虫以外は、速報参照）。

大阪府レッドリスト種など

2008年の調査開始以降に確認された大阪府レッドリスト種を表9に示した。2021年と2022年の調査で新たに追加確認された種は、情報不足のヘリグロツユムシ（図6）のみであった。

表9. 和泉葛城山山頂付近において2008年から2022年にかけて行われた調査で確認された大阪府レッドリスト種

ランク	目	科	種	学名	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
絶滅危惧Ⅰ類																			
	バッタ目	マツムシ科	カヤコオロギ	<i>Euscirtus japonicus</i>	○														
絶滅危惧Ⅱ類																			
	バッタ目	バッタ科	ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			セグロイナゴ	<i>Shirakiacris shirakii</i>			○												
	カメムシ目	ヨコバイ科	テングオオヨコバイ	<i>Tengirhinus tengu</i>	○	○				○									
	コウチュウ目	コガネムシ科	ムネアカセンチュウコガネ	<i>Bolbocerosoma nigroplagiatum</i>						○									
準絶滅危惧																			
	トンボ目	アオイトトンボ科	オツネイトンボ	<i>Sympecma paedisca</i>				○	○					○				○	○
		ムカシトンボ科	ムカシトンボ	<i>Epiophlebia superstes</i>			○												
		ヤンマ科	オオルリボシヤンマ	<i>Aeschna nigroflava</i>									○						
		トンボ科	ミヤマアカネ	<i>Sympetrum pedemontanum elatum</i>			○					○	○	○	○	○	○	○	○
			アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>			○								○	○			
	バッタ目	ササキリモドキ科	ヒトコブササキリモドキ	<i>Tettigoniopsis kongozanensis</i>			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	カメムシ目	セミ科	ハルゼミ	<i>Yezoterpnosia vacua</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			エゾゼミ	<i>Lyristes japonicus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		アメンボ科	ヤスマツアメンボ	<i>Gerris insularis</i>									○						
	コウチュウ目	クワガタムシ科	オニクワガタ	<i>Prismognathus angularis angularis</i>	○			○	○										
		テントウムシ科	セダカテントウムシ	<i>Bolbomorphus gibbosus</i>		○		○		○	○						○	○	○
		テントウムシ科	シロジュウゴホシテントウ	<i>Calvia quindecimguttata</i>									○	○					
		カミキリムシ科	イワキセダカコブヤハズカミキリ	<i>Parechthistatus gibber shibatai</i>						○				○					
	チョウ目	タテハチョウ科	オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i>						○									
			スミナガシ	<i>Dichorragia nesimachus nesiotis</i>					○										
			ミスジチョウ	<i>Neptis philyra excellens</i>						○				○					
		セセリチョウ科	アオバセセリ	<i>Choaspes benjaminii japonica</i>								○	○		○				
			ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus lamprospilus</i>					○	○	○	○						○	
		ヤマムシ科	エゾヨツメ	<i>Agria japonica microtau</i>					○										
		シャチホコ科	フナアオシャチホコ	<i>Syntypistis punctatella</i>									○		○				
情報不足																			
	バッタ目	ツユムシ科	ヘリグロツユムシ	<i>Psyrana japonica</i>														○	
	アミメカゲロウ目	クシヒゲカゲロウ科	クシヒゲカゲロウ	<i>Dilar japonicus</i>											○				
	コウチュウ目	コメツクムシ科	トラフコメツク	<i>Selatosomus onerosus</i>				○											
			ルリツヤハダコメツク	<i>Hemicrepidius subcyaneus</i>					○										
	ハチ目	ミツバチ科	クロマルハナバチ	<i>Bombus ignitus</i>	○	○		○	○					○		○	○		

イワキセダカコブヤハズカミキリは、これまでの報告書では、セダカコブヤハズカミキリ *Parechthistatus gibber gibber* として発表してきた。

毎年確認されている種としては、絶滅危惧Ⅱ類のナキイナゴ、準絶滅危惧のハルゼミとエゾゼミがあげられる。ミヤマアカネも8月に見る機会が確実になっていて、2022年には10月にも見られた。以上の種に加えて、セダカテントウムシも増減なしという印象である。ただ、ヒトコブササキリモドキに関しては、2020年に確認されず、2021年と2022年の両年とも確認できたものの、確認個体数は減少している。

その他、山地性の種や、貝塚市内でこれまでの記録が和泉葛城山の山頂付近に限られるという種、

あるいは2014年の大阪府レッドリストの改訂においてランク外とされた種、和歌山県のレッドリスト種などを注目種とし、それらの確認年を表10に示した。

表10. 和泉葛城山山頂付近において2008年から2022年にかけて行われた調査で確認された注目種

目	科	種	学名	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
バッタ目	カマドウマ科	チビクチキウマ	<i>Anoplophilus minor</i>					○	○	○	○						○	○
	キリギリス科	ヒメクサギリ	<i>Ruspolia dubia</i>	○	○	○	○		○	○								
	ツユムシ科	エゾツユムシ	<i>Kuwayamaea sapporensis</i>				○		○		○							
		ホソクビツユムシ	<i>Shirakisotima japonica</i>				○	○				○	○	○	○	○	○	
ナナフシ目	ナナフシ科	ニホンビナナフシ	<i>Micadina phluctainoides</i>		○		○	○	○	○	○		○	○				
ハサミムシ目	クギヌキハサミムシ科	エゾハサミムシ	<i>Eparchus yezoensis</i>					○	○	○			○					
		コブハサミムシ	<i>Anechura harmandi</i>				○		○		○	○			○			
カメムシ目	アワフキムシ科	テングアワフキ	<i>Philagra albinotata</i>	○					○	○		○						
		オオトビサンガメ	<i>Isyndus obscurus</i>	○	○		○	○			○		○		○			○
	カメムシ科	ツノアオカメムシ	<i>Pentatoma japonica</i>	○	○	○				○	○	○	○	○				
		エゾアオカメムシ	<i>Palomena angulosa</i>			○	○			○			○	○				
		トゲカメムシ	<i>Carbula humerigera</i>	○	○		○	○	○		○	○				○	○	○
		ツマジロカメムシ	<i>Menida violacea</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
		ミヤマカメムシ	<i>Hermolaus amurensis</i>		○			○			○							
		トホシカメムシ	<i>Lelia decempunctata</i>	○	○			○		○	○		○	○	○	○		
		ヨツボシカメムシ	<i>Homalagonia obtusa</i>			○							○	○	○	○		
		アカアシクワガタ	<i>Nipponodorcus rubrofemoratus</i>						○									
コウチュウ目	クワガタムシ科	ミヤマクワガタ	<i>Lucanus maculiformoratus</i>	○	○			○									○	
		シロホシテントウ	<i>Vibidia duodecimguttata</i>		○	○		○	○				○					
ゾウムシ目	ゾウムシ科	ハスジゾウムシ	<i>Cleonus japonicus japonicus</i>	○														
	タテハチョウ科	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i>				○	○	○	○		○		○	○	○		○
チョウ目	ヤママユガ科	アサギマダラ	<i>Parantica sita nipponica</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		ヒメヤママユ	<i>Caligula jonasii jonasii</i>				○								○	○		
ハチ目	スズメバチ科	シダクロスズメバチ	<i>Vespa shidai</i>	○	○				○	○	○		○				○	○
		キオビホオナガスズメバチ	<i>Dolichovespula media</i>						○			○						
	ミツバチ科	オオマルハナバチ	<i>Bombus hypocrita hypocrita</i>			○				○								

コウチュウ目の項で、アカアシクワガタに関して述べたように、月1回の日中における見取り中心の調査では、生息しているのに確認できない年が出てしまう可能性がある。チビクチキウマのように、2016年から5年連続で確認されずにいても、2021年と2022年の両年で確認されれば、移動力が高くない種なので、継続して生息していたものと推測される。また、山地性のカメムシ科の場合のように、最大5種から2022年に1種に減少してしまうと、何等かの傾向を読み取ることもできるかもしれない。

謝辞

和泉葛城山の生物相に関してご教示いただいた佐々木仁、澤田義弘、中村進、湯浅幸子、吉田元三郎の各氏、および貝塚市立自然遊学館のスタッフに謝意を表する。

特に、澤田義弘氏には、これまで岩崎が記録・報告してきた和泉葛城山のアリガタハネカクシ（岩崎、2014など）に関して、コアリガタハネカクシ *Megalopaederus lewisi* ではなく、オオアリガタハネカクシ *Paederus* (*Megalopaederus*) *poweri* であると、ご教示いただいた。このアリガタムシは、ほぼ調査シーズンを通して、ミヤコザサの葉上や木道の柵でよく見られるものである。

引用文献・参考文献

岩崎 拓 (2014) 和泉葛城山の昆虫 (2012年度調査). 貝塚の自然 第16号: 29-38.

(注) 付図の2012年11月8日の調査速報に、コアリガタハネカクシとして、画像を掲載している (p. 38)。

岩崎 拓 (2022) 和泉葛城山昆虫調査 2021. 自然遊学館だより No. 101 : 13-14.

(注) ヘリグロツユムシが大阪府レッドリストにおいて情報不足になっていることを知らずに、単に注目種として扱ってしまった。

岩崎 拓 (2023) 和泉葛城山昆虫調査 2022. 自然遊学館だより No. 106 : 3-5.

岩崎 拓 (2024) 和泉葛城山の昆虫 (2019-2020 年度調査). 貝塚の自然 第 23 号 : 39-52.

上久保文貴・湯浅幸子・岩崎 拓 (2012) 和泉葛城山の植物 (2010 年調査). 貝塚の自然 第 14 号 : 47-52.

大阪府 (2014) 『大阪府レッドリスト 2014』, 48pp.

金沢 至・松本吏樹郎 (2006) 『改定版 スズメバチとアシナガバチ (ミニガイド No. 6)』, 大阪自然史センター, 44pp.

佐々木 仁 (2024) 『和泉葛城山山頂周辺のカミキリムシ (令和 6 年版)』, 46pp.

初宿成彦 (2005) 『大阪のテントウムシ (ミニガイド No. 16)』 (改定版), 大阪自然史センター, 39pp.

竹内正人 (2009) 『写真集 ハナアブ 300』, 双翅目談話会, 300pp. (+日本のハナアブ科暫定リスト 8pp. +和名索引 4pp.)

村井貴史・伊藤ふくお (2011) 『バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑』, 日本直翅類学会監修, 北海道大学出版会, 449pp.

安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫 (2000) 『日本原色カメムシ図鑑』, 友国雅章監修, 全国農村教育協会, 380pp.

吉田浩史・岩崎 拓 (2012) 大阪府貝塚市のハバチ亜目. 貝塚の自然 第 14 号 : 37-46.

付図

各月の調査後すぐに、気候や他の動植物の状況も含めて、調査速報を作成した。それらを付図として以下に掲載した。

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年4月）

2021年4月15日 天候：晴れ 調査者1名

正午の気温が8℃台とやや寒く、チョウ類の飛翔は全く見られませんでした。ブナ林内の樹々もまだ葉があまり開かず、日差しが林床に咲く花に降り注いでいました。昆虫はまだ少なかったため、昆虫以外の報告もします。



昆虫

虫がやや多かったのは、ナガバモミジイチゴの花上ででした。コマルハナバチやビロードツリアブ、その他、ハナバチ類が吸蜜していました。草の上では、ヤブキリの幼虫と数種のアリ、地面ではセンチコガネ、木柵の裏側でセダカテントウダマシを確認しました。



セダカテントウダマシ

植物（ブナ林内）

木本では、コバノミツバツツジ、ミヤマシキミ、ウリハダカエデの花が目立ちました。コバノミツバツツジは既に落花しているものもありました。草本では、エイザンスミレやニリンソウの花を撮影することができました。（* 稜線の舗装道路沿いには、外来の普通種が多数あり）



エイザンスミレ

鳥

ウグイスの鳴き声もそれほど多くなく、鳴き方もきれいなホーホケキョではありません。ブナ林内では、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラ、ヒヨドリ、アオゲラ、コゲラの姿を見ましたが、なかなか写真を撮らせてくれません。画像は、林縁から出てきたアオジです。



アオジ

その他

調査を開始してすぐに、空の色が暗いのかと感じました。見上げると、太陽の周りに輪が出ていました。内暈と書いて、「うちがさ」や「ないうん」と読む現象だそうです。晴れているようでいながら、薄い雲が覆っていて、光が屈折したものだと考えられます。



内暈

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年5月）

2021年5月14日 天候：くもり・晴れ 調査者1名

先月の同じ場所を撮影すると、ブナ林内の葉の緑色が増えたことが分かります。気温も20℃を越えて快適だったのですが、トンボ目の確認はなく、チョウ類3種、直翅類はバッタ目3種だけという結果は意外でした。



チョウ目 チョウ類3種

チョウ類は、クロヒカゲ、テングチョウ、ヤマトシジミの3種を、それぞれ1個体だけ確認しました。ガ類の成虫は、写真のウスオビヒメエダシャクを確認しただけで、あとは、チャバネフユエダシャク、マイマイガ、ドクガの幼虫を確認しました。



ウスオビヒメエダシャク

コウチュウ目

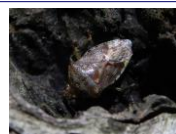
交尾ペアを確認したのは、アカクビナガハムシ、カクムネベニボタル、ニセクロホシテンドウゴミムシダマシです。ドロハマキチョッキリがウリハダカエデの葉を巻いていました。その他、ヒメジョウカイ、アオハムシダマシ、イタドリハムシ、ツツソウムシなどを確認しました。



アカクビナガハムシ

カメムシ目

ハルゼミの鳴き声を20個体ほど確認しました。一番個体数が多かったのは、イタドリの茎にいたオオツマキハリカメムシです。駐車場の水たまりには、ヒメアメンボが10個体ほどいました。右の写真は、木柵の節穴にいたヒメツノカメムシです。こちらは1個体だけでした。



ヒメツノカメムシ

ハエ目・ハチ目

ハエ目で目立っていたのは、ネウスオドリバエです。その他、マダラヒロクチバエやキロナミホシヒラタアブを確認しました。ハチ目では、クロオオアリとムネアカオオアリが巣立ちの準備をしていました。5月のシダクロスズメバチは、書き留めておくべきでしょう。



ネウスオドリバエ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年6月）

2021年6月8日 天候：晴れ 調査者1名

木本では、ウツギの花が多く咲いていました。その多さの割には、訪花するハナアブやハナバチの類が少ないような気がしました。ブナ林内の緑はまだ明るさが残っていて、林縁から林内に入って来るスジグロシロチョウもいました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類では、テングチョウが300個体以上、山頂のトイレ付近に集まっていた。ジャコウアゲハ、アサギマダラ、コチャバナセセリは、各1個体の確認です。ガ類では、写真のオオカガバのほか、カギシロスジアオシャク、フタヤマエダシャク、キンモンガなどを確認しました。



オオカガバ

バッタ目など

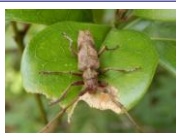
チビクチキウマは神社の石段近くで1個体、Bコースのデッキに積もった落葉の中から1個体を確認しました。ナキイナゴは、まだ幼虫が多く、鳴き声は1個体だけを聞きました。その他、ヤマトフキバッタの幼虫を多数、オオカマキリの幼虫を1個体確認しました。



チビクチキウマ

コウチュウ目

カミキリムシの仲間は、写真のヤハズカミキリとクワサビカミキリを1個体ずつ確認しました。ほぼ毎年確認できる常連以外では、ニワハンミョウ、ドロハマキチョッキリ、ツツソウムシ、イタドリハムシなどを確認しました。イタドリハムシが常連と言えないのは、やや不思議です。



ヤハズカミキリ

その他

カメムシ目では、ハルゼミが8個体鳴いていました。先月から半減しました。モンキクロカスミカメは増えているのかもしれませんが。ラクダムシは山頂での記録を覚えていません。アカマツ林の近くにいました。シリアゲムシ目はヤマトシリアゲだけでした。



ラクダムシ

付図1（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年4月）

付図2（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年5月）

付図3（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年6月）

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年7月）

2021年7月22日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

林内は、下界より気温がほぼ10℃低いので、まさに天然のクーラーです。リョウブとオカトラノオの白い花が目立ちます。多くの地点で、外来鳥のソウシチョウ（右の写真）が群れていて、複雑な気持ちになりました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、スジグロシロチョウ、キタキチョウ、クロヒカゲ、サカハチチョウ、コムシジ、ミドリヒョウモン、ツマグロヒョウモン、テングチョウ、ルリシジミ、ホソバセセリ、キマダラセセリを確認しました。ガ類では、アケビコノハやゴマフリドクガの幼虫などを確認しました。



ホソバセセリ

バッタ目

昨年の調査で確認できなかったヒトコブササキリモドキを1♂1♀確認できたので、ほっとしました。個体数が多かったのは、ホソクビツユムシで30個体以上の鳴き声を聞きました。ツマグロバッタも個体数が多く、ナキナゴはシーズンの最後といった感じでした。



ヒトコブササキリモドキ

コウチュウ目

屋間に樹液を吸っているミヤマクワガタのオスを見たのは久しぶりです。植栽のアジサイに、アオハナムグリが多数、集まっていた。そこにいたホソトラカミキリは、自然遊学館に標本がない種でした。その他、コウヤホソハナカミキリやムネアカクシヒゲムシなどを確認しました。



ミヤマクワガタ

カメムシ目

セミ科で鳴き声をよく聞いたのは、ニイニゼミとヒグラシでした。エソゼミは、鳴き声の数が少なく、これからが本番だと考えたいです。その他、オモゴヨコバイ、コガシラウソク、ハリカメムシ、オオヘリカメムシなどを確認しました。



ヒグラシ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年8月）

2021年8月24日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

8月上旬の長雨・強風による倒木と落枝が散見されました。先月同様、正午近くの気温が約22℃で、快適です。人間の世界は新型コロナの第5波で大騒動ですが、ミヤマアカネは例年通り、8月に姿を見せてくれました。



チョウ目 チョウ類10種

チョウ類は、オナガアゲハ、スジグロシロチョウ、キタキチョウ、クロヒカゲ、サカハチチョウ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、イチモンジセセリ、コチャバナセセリ、キマダラセセリを確認しました。ガ類では、キンモンガが多く、幼虫では、カクモンヒトリなどを確認しました。



コウソハマキモドキ

バッタ目

チビクキクマがいる場所は、ほぼ決まっています。ホソクビツユムシは先月に続き、鳴いていました。写真のヘリグロツユムシを、初めて撮影できました。ヒロバナヒナバッタは成虫になりました。その他、ヤブキリ、ヒメギス、ヤマクダマキモドキ、ツマグロバッタなどを確認しました。



ヘリグロツユムシ

コウチュウ目

右の写真のマルバネコブヒゲカミキリは、自然遊学館に標本がなかった種です。木柵の上で死んでいました。ウバタマムシは、ミヤコザサの葉の上でじっとしていました。サビハネカクシ、クロナガキマワリ、ルリマルノミハムシも、低温のせいかな、活発ではありませんでした。



マルバネコブヒゲカミキリ

カメムシ目

セミ科では、ミンミンゼミ、エソゼミ、ツクツクボウシの鳴き声を聞きました。ミヤマアワフキ、オモゴヨコバイ、トグカメムシ、オオヘリカメムシは、山頂付近でよく見かける種ですが、ナシカメムシは、やや珍しい部類に入るのかもしれない。



トグカメムシ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年9月）

2021年9月10日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

期待して行った割には、珍しい種がいくつ、普通種さえ個体数が少ないという結果でした。長期的な昆虫類の減少の可能性とは別に、例年と違う天気として、8月中旬の長雨と低温を記憶に留めておく必要があるかもしれません。



チョウ目 チョウ類12種

チョウ類は、キアゲハ、モンキアゲハ、スジグロシロチョウ、キタキチョウ、クロヒカゲ、ヒカゲチョウ、アサマイチモンジ、アカタテハ、ミドリヒョウモン、ツマグロヒョウモン、アサギマダラ、イチモンジセセリを確認しました。個体数は各種とも少数でした。



ミドリヒョウモン

バッタ目

昨年の調査で確認したツユムシ科は、ホソクビツユムシだけでした。写真のアシグロツユムシは1個体だけですが、2年ぶりの確認となりました（山頂の普通種だったはずなのに）。ツマグロバッタも1個体だけの確認で、他の普通種のバッタも確認されず、要注意の状態でしょう。



アシグロツユムシ

カメムシ目

セミ類の鳴き声は、ツクツクボウシがほとんどで、ニイニゼミとミンミンゼミが少し、エソゼミは弱々しく鳴く1個体だけでした。写真は、山頂で普通種のオヌキヨコバイです。確認されたのはヨコバイ亜目だけで、カメムシ亜目は全く確認できませんでした。



オヌキヨコバイ

ハチ目

シワクシケアリ、ムネアカオオアリ、ハヤシクロヤマアリなど、アリ類の種数は9種でしたが、個体数は減ってきました。写真はムネアカアリバチのメスを選びました。その他、キロスズメバチ、オオモンクロベッコウ、クロアナバチなどを確認しました。



ムネアカアリバチ

付図4（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年7月）

付図5（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年8月）

付図6（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年9月）

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年10月）

2021年10月7日 天候：晴れ 調査者1名

昆虫は先月同様、ほとんど普通種の確認に終わりました。林内ではテイショウソウ、ミカエリソウ、アキチョウジの花などが目立ち、整地された広場の林縁ではアケボノソウ（右の写真）が多数咲いていました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、**キアゲハ**、**キタキチョウ**、**クロヒカゲ**、**アカタテハ**、**キタテハ**、**ミドリヒョウモン**、**ツマグロヒョウモン**、**アサギマダラ**、**ウラナミシジミ**、**ヤマトシジミ**、**チャバネセセリ**を確認しました。ガ類では、**クロホウジャク**と**ホシホウジャク**の吸蜜シーンなどを見ました。



アサギマダラ

バッタ目など

ヒロハネヒナバッタの鳴き声を、先月より多く聞きました。**ヤマトフキバッタ**の少なさは先月と同じでした。樹上からは、**クサヒバリ**の鳴き声に混じって、**アオマツムシ**の鳴き声も少し聞こえます。その他、**オオカマキリ**や**エダナフシ**などを確認しました。



ヒロハネヒナバッタ

カメムシ目

セミ類では、**エゾゼミ**が1個体だけ鳴いていました。**ツマジロカメムシ**は幼虫を3個体確認しました。その他、**ミヤマアワフキ**や**ベニキジラミ**（虫こぶも）を確認しましたが、右の画像のふ化したての幼虫は種名が分かりませんので。確認種数の少なさが気になります。



不明種のふ化

ハエ目・ハチ目

ハエ目では、**オオハナアブ**、**シマハナアブ**、**ホソヒラタアブ**など、平地での調査かと間違ふほど、普通種の確認ばかりでした。ハチ目では、**オオスズメバチ**、**キロスズメバチ**、**ホソアシナガバチ**などを確認し、アリ類では、**シワクシケアリ**の活動が目立ちました。



クロハナアブ属

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年11月）

2021年11月4日 天候：晴れ 調査者1名

正午の気温は約12℃ですが、日向では寒くありません。紅葉や黄葉が目立つようになりました。花はヨシノアザミが終わりかけて、ノコンギクが目立つ程度です。昆虫は減り、冬鳥はまだ来ず、物足りない調査になりました。



チョウ目 チョウ類2種

チョウ類は、車道に沿った場所で、**ヤマトシジミ**を20個体程度と、**テングチョウ**を1個体だけ確認しました。ヨシノアザミの花がほとんど萎れていて、チョウ類を呼べない状態でした。**ホシホウジャク**も1個体近づきましたが、吸蜜せずに離れていきました。



ヤマトシジミ

バッタ目

写真は、先月に引き続き、**ヒロハネヒナバッタ**です。そこそこ鳴いていました。樹上からは**クサヒバリ**、地面からは**マダラスズ**と**モリオカメコオロギ**の鳴き声が聞こえます。草上で**ツチナゴ**と**ヤマトフキバッタ**を、それぞれ1個体だけ確認しました。



ヒロハネヒナバッタ

カメムシ目

セアカツノカメムシ、**クサギカメムシ**、**ツマジロカメムシ**幼虫、**ヒメクモヘリカメムシ**は、常連といったところで。最近では、**チャバネアオカメムシ**が増えているように思えます。右の写真は、木柵に溶け込んだように見える**コミミズク**の幼虫です（右向き）。



コミミズク幼虫

その他

コウチュウ目は、写真の**キオビナガカッコウムシ**のほか、**オオアリガタハネカクシ**と**ツブノミハムシ**を確認しました。その他の目では、**ハタケヤマヒゲボソムシヒキ**、**キアシフンバエ**、**コマルハナバチ**などを確認しました。たくさんいた**Bibio**属の**ケバエ**は、種名が分かりません。



キオビナガカッコウムシ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2021年12月）

2021年12月3日 天候：晴れ 調査者1名

山頂の正午の気温は3℃台でしたが、日向では寒くありません。ブナの葉は落ちていました。まだ少し、カエデ類の紅葉が残っていました。昆虫は少しだけいましたが、カメムシ目の確認がゼロなのは意外でした。



チョウ目 チョウ類0種

チョウ類は、まったく見ませんでした。ガ類は、木道の柵で、**ヒトスジマダラエダシャク**の幼虫を1個体だけ確認しました。



ヒトスジマダラエダシャク幼虫

バッタ目など

バッタ目では、**ヒロハネヒナバッタ**を2♂1♀確認し、♂はまだ鳴いて♀を誘っていました。ほかに、**マダラスズ**の鳴き声を聞きました。カマキリ目では、**オオカマキリ**の卵囊を2個、確認しました。今年も、**オオカマキリ**だけの確認に終わりました。



オオカマキリ卵囊

トンボ目

オツネントンボのメスを1個体だけ確認しました。まだ飛翔できていました。これから成虫のまま冬を越すでしょう。



オツネントンボ

ハチ目

シダクロスズメバチの女王を2個体確認しました。顔面の黒色の縦筋がつながっているのが特徴です。越冬場所を探していたのかもしれません。その他、**クロヤマアリ**と**ムネボソアリ**を確認しました。



シダクロスズメバチ

付図7（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年10月）

付図8（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年11月）

付図9（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2021年12月）

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年4月）

2022年4月7日 天候：晴れ 調査者1名

4月上旬とは思えない陽気で、調査中に気温が20℃を超えました。登山道脇では、ユリウサビ（右の写真）、シハイスミシ、ヤマネコノメソウなどが咲いていました。林縁では、タムシバやキブシの花が目立っていました。



チョウ目 チョウ類5種

4月の調査で、ヒオドシチョウが見られたのは、15年間で9回という割合です。同じ場所にオス成虫が縄張りをつくっています。その他、キタキチョウ、テングチョウ、キタテハ、ルリタテハを確認しました。5種とも1個体の確認で、昆虫のシーズンはまだ始まったばかりです。



ヒオドシチョウ

カメムシ目

写真のオオトビサシガメは、クモが餌にしようと思戦苦闘していた獲物でした。写真を撮るために、生態系を乱してしまいました。この個体も、ミツボシツチカメムシも、山頂のトイレの壁にいたものです。いずれも1個体だけの確認に終わりました。



オオトビサシガメ

コウチュウ目

エグリデオキノコムシは、触角の第5節は細長く、第6節から少し広がります。スグロキハムシは、飛翔時の写真が撮れそうでしたが、ピンボケでした。これも木柵上にいたものです。その他、めくった石の下で、ヒメクロツヤヒラゴミムシを見つけました。



エグリデオキノコムシ

その他

鳥では、カシラダカを見て、まだ北へ旅立っていないのかと思いました。鳥の写真はエナガを腹側から撮ただけだったので、代わりと言ってはなんですが、キブシの花を載せておきます。新型コロナウイルスは、第6波が収まらないうちに、第7波が来るのか？、という状況です。



キブシ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年5月）

2022年5月19日 天候：晴れ 調査者1名

ブナの葉で林内がやや暗く、咲いている草本の花は、先月と比べてとても少なくなりました。右の写真はフタリシズカです。林縁では、アキグミの花が多く咲き、ハナアブやハナバチの仲間が多く来ていました。



チョウ目 チョウ類9種

チョウ類は、オナガアゲハ、モンキアゲハ、ジャコウアゲハ、クロヒカゲ、サカハチチョウ、テングチョウなど、9種を確認しました。ガ類では、マドガとウスオビヒメエダシャクのほか、ドクガとミノウスバの幼虫を確認しました。ミノウスバの幼虫は周回運動をしていました。



サカハチチョウ

カメムシ目

ハルゼミが12個体、鳴いていました。オオヘリカメムシ、トゲカメムシ（幼虫）、セアカツノカメムシなどは、山で多く見られる種です。ヒメクモヘリカメムシとオオツマキヘリカメムシは、数ペアが交尾中でした。カエデキジラミの名前がなかなか出て来ず、歳を感じました。



トゲカメムシの幼虫

コウチュウ目

甲虫の季節と言っていいいでしょう。稀な種とは言えませんが、アシナガコガネ、オオアカコメツキ、ヨツボシゴミムシダマシ、シロトラカミキリ、スグロアカハムシ、イチモンジカメノコハムシ、ヒゲナガオトシブミなどの写真を撮ることが出来ました。



ヒゲナガオトシブミ

その他

シリアゲムシ目のホソマダラシリアゲ、ハエ目のオオイシアブがやや稀な種かもしれません。トンボ目とバッタ目で種を確定できたものはなく、ハチ目も、アリ類が7種とマルハナバチ類が2種、確認できただけでした。アキグミの花に来ていたハナアブ類の6種も常連ばかりでした。



ホソマダラシリアゲ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年6月）

2022年6月9日 天候：晴れ 調査者1名

晴天の下、林縁ではウツギの花が満開です。ハルゼミの鳴き声を11個体、聞きました。ブナ林内は、かなり暗くなり、林床では、カキノハグサ（右の写真）やタツナミソウの仲間がひっそりと咲いていました。



チョウ目 チョウ類10種

チョウ類は、オナガアゲハ、クロヒカゲ、ダイミョウセセリ、ムラサキシジミなど、10種を確認しました。テングチョウの群飛は100個体ほどでした。ガ類は、キシヤチホコ、クロスジシャチホコ、ウスベリケンモン、ニトベミノガ幼虫、マエキカギバなどを確認しました。



キシヤチホコ

コウチュウ目

セダカテントウダマシを2個体、確認しました。いずれもササの葉上です。トゲヒゲトラカミキリ、コヨツボシケシキスイ、キアシリリツツハムシなどはまだしも、それ以外は、山頂での常連の種や、平地にもいる種ばかりで、物足りない結果でした。



セダカテントウダマシ

ハエ目

ハナアブの仲間が種数の半分（7種）を占めました。その中では、シロオビベッコウハナアブとカオグロオビホシヒラタアブがやや希な種かもしれません。アカメセダカオドリバエとマガリケムシヒキの個体数が多く、葉上で他の虫を探すのに邪魔になるくらいでした。



シロオビベッコウハナアブ

その他

ナキイナゴが3個体、鳴いていました。2個体いたキイロスズメバチは、やや攻撃的でした。女王だと思えます。その他、オオカマキリ幼虫、オオヘリカメムシ、ホソアシナガバチ、コマルハナバチなどを確認しました。



ナキイナゴ

付図1（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年4月）

付図2（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年5月）

付図3（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年6月）

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年7月）

2022年7月7日 天候：晴れ 調査者1名

林内では、風が吹くと涼しく、風がやむと蒸し暑くなる状態です。山頂神社の周辺でコオニヤンマが飛んでいました（右の写真）。ナキイナゴとヒロハネヒナバッタの鳴き声は少しです。オオカマキリは幼虫1個体だけでした。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、スジグロシロチョウ、ヒカゲチョウ、ミドリヒョウモン、アサギマダラ、テングチョウ、ベニシジミ、ムラサキシジミを確認しました。テングチョウとベニシジミは10個体程度、他は1〜2個体のみです。ガ類では、トンボエダシャクを確認しました。



ミドリヒョウモン

カメムシ目

ハルゼミ2個体、エソゼミ1個体、ニイニゼミ10個体程度が鳴いていました。写真のナシカメムシは、トイレ前広場周辺に偏しています。セアカツノカメムシは交尾の時期です。その他、カエデキジラミ、チャバネアオカメムシ、ハラヒロヘリカメムシなどを確認しました。



ナシカメムシ

コウチュウ目

個体数は多かったのは、オオオハバタルと、例の超長名種です。カミキリムシ科は、センノカミキリ、ヘリグロリンゴカミキリ、ホソトラカミキリを確認しました。クロボシヒラタシデムシやセンチコガネなどの腐食者もありました。キマダラヒゲナガゾウムシを初めて見ました。



センノカミキリ

ハエ目

写真はベッコウハナアブを選びました。シナヒラタヤドリバエの交尾も撮れたのですが、ハナアブ科は、ナミハナアブとシマハナアブ以外に、不明種が2種いました。この時期、チョウ類も含めて、オカトラノオの花が大人気の吸蜜源です。



ベッコウハナアブ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年8月）

2022年8月5日 天候：晴れ 調査者1名

雨が止むのを待って調査を始め、途中からは晴天になりました。フナ林内は葉が茂って暗くなり、林縁で目立つのはリョウブの花くらいです。8月にミヤマアカネを確認するのは8年連続で、今年は1♂1♀でした。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、クロヒカゲ、ヒカゲチョウ、コムスジ、ミドリヒョウモン、ムラサキシジミ、コチャバネセセリ、ダイミョウセセリなどを確認しました。クロヒカゲが12個体で、他は1〜2個体です。ガ類では、フタジマネグロシャチホコやコフタオビシャチホコなどを確認しました。



フタジマネグロシャチホコ

バッタ目

マダラスとツマグロバッタ以外は、いずれも1個体だけの確認です。以下、ヒトコブササキリモドキがミヤコザサに、ツマグロバッタはススキに、コロギスとチビクチウマは木柵に止まっていた。地面で跳ねていたハヤシウマは幼虫でした。



ヒトコブササキリモドキ

カメムシ目

エソゼミ、ミンミンゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ヒグラシの鳴き声を聞きました。最も多かった鳴き声はエソゼミです。写真を撮影できたのは、マルウンカ、ヒメツノカメムシ、ハリカメムシ幼虫などでした。ハリカメムシは普通種ながら、幼虫は面白い形をしています。



ヒメツノカメムシ

ハエ目

ウシアブがまとわり付くのは毎年のことです。ヒメキンムシヒキは、自然遊学館に標本がなかった種です。サッポロアシナガムシヒキの画像はややピンボケで、残念でした。その他、ナガヒラタアブ、セスジハリバエ、ヨコシマオオハリバエなどの常連の種を確認しました。



ヒメキンムシヒキ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年9月）

2022年9月12日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

下界では再び残暑が厳しくなりましたが、山頂の午後1時の気温は26℃と、冷房は要りません。フナ林内はかなり暗くなり、鳥の鳴き声もあまり聞こえません。林内のあちこちにツリバナの花が咲いていました。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、スジグロシロチョウ、キタキチョウ、ヒカゲチョウ、サカハチチョウ、ミドリヒョウモン、アサギマダラ、ルリシジミを確認しました。アサギマダラはまだ3個体でした。ガ類では、スガ科のYponomeuta属、ホタルガ、キンモンガ、シロオビドクガなどを確認しました。



シロオビドクガ

バッタ目

バッタ科は、ツマグロバッタとヒロハネヒナバッタだけでした。ツユムシ科を全くみませんでした（ヒメツユムシはササキリモドキ科です）。カンタンとクサヒバリは、前翅を見て、確認しました。モリオカメコオロギは前翅を見て、確認しました。



ヒメツユムシ

カメムシ目

セミ類では、ツクツクボウシが盛んに鳴いていました。エソゼミは、残りわずかです。ミヤマアワフキやトゲカメムシは常連です。セアカツノカメムシもそうですが、今回は幼虫での確認でした。写真のマツヒラタナガカメムシは、見取り法ではなかなか目にすることがありません。



マツヒラタナガカメムシ

ハチ目

キイロスズメバチに5個体ほど、キボシアシナガバチに2個体、遭遇しました。ムネアカオオアリやシワクシケアリなどの木柵で見るアリ類は、夏に比べて減りました。ヒヨドリバナで吸蜜するキンケハラナガツチバチは、これからピークでしょう。



キボシアシナガバチ

付図4（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年7月）

付図5（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年8月）

付図6（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年9月）

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年10月）

2022年10月3日 天候：くもり 調査者1名

セミの鳴き声は聞きませんでした。10月にミヤマアカネ（右の写真）が山頂に残っているのは、希なケースでしょう。ツキヨタケがびっしり生えたブナの立ち枯れ木や、黒いビニールで幹を巻かれたカシナガ対策木がありました。



アサギマダラ

チョウ目 チョウ類7種

アサギマダラが10個体以上集まり、ヨシノアザミから吸蜜していて、時々、ミドリヒョウモン、クロホウジャク、ホシホウジャクなどと争っていました。その他、チョウ類は、キタキチョウ、コムシジ、ウラナミシジミ、ヤマトシジミ、チャパネセセリを確認しました。



バッタ目など

ツコムシ類とササキリ類をまったく見ませんでした。モリオカメコオロギ、マダラスズ、カネタタキ、ヒロバネヒナバッタの鳴き声を聞きました。ヒメギス、ツチイナゴ幼虫、オオカマキリ（1♂4♀）と続けば、平地での調査結果と間違えそうです。



オオカマキリ

ハエ目

ヨシノアザミに、オオハナアブ、ホソヒラタアブ、コマバムツボシヒラタアブ、ケベリヒラタアブ、ナミハナアブが訪花していました。ヨコジマオオハナバエは、常連のヤドリバエです。1個体のオオカマキリのメス成虫に、カマキリヤドリバエの卵が付着していました。



コマバムツボシヒラタアブ

ハチ目

先月と同じく、キロスズメバチは攻撃的ではありません。コマルハナバチがヨシノアザミに、キンケハラナガツチバチはヒヨドリバナに来ていました。写真は、アケボノソウの蜜腺に来ていたトビロケアリです。ムネアカオオアリやシクシケアリなど、7種のアリを確認しました。



トビロケアリ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年11月）

2022年11月4日 天候：晴れ 調査者1名

ブナ林の中も、かなり紅葉が進みました。登山道Aコースで紅葉の写真を撮りたかったのですが、通行止めでした。右の写真は、Bコースで撮影したものです。正午の気温は10℃ながら、南斜面の日向では寒さを感じませんでした。



チョウ目 チョウ類2種

チョウ類は、ウラナミシジミとテングチョウを1個体ずつ確認しただけでした。来月はチョウに出会うこともなさそうです。紅葉の時期には、木柵の上を這うアカイラガの幼虫をよく見ます。その他、ブナの根元に、種名が分からないエダシヤク類の幼虫がいました。



アカイラガ幼虫

バッタ目など

バッタ目では、樹上からクサヒバリ、地面からモリオカメコオロギとマダラスズの弱々しい鳴き声が聞こえます。モリヒシバッタとヒロバネヒナバッタは撮影できました。カマキリ目では、2008年の調査開始以来初めて、ヒメカマキリを確認しました。



ヒメカマキリ

カメムシ目

枯れたアカマツの樹皮下に、オオヒラタカメムシが3個体いました。オオトビサシガメ、セアカツノカメムシ、クサギカメムシを木柵上で、ハサミツノカメムシとシモフリクチフトカメムシを落葉上で確認しました。これら6種だけでも、目別では最多の種数です。



シモフリクチフトカメムシ

その他

右の写真は、オツネントンボのメスです。成虫のまま、越冬します。オオハナアブとアシフトハナアブは、平地にもいる種です。キロスズメバチは1個体だけ確認しました。たぶん越冬場所を探していた女王だと思われます。最も活動的だったのは、石の下のクロヤマアリのものでした。



オツネントンボ

「和泉葛城山」昆虫調査速報（2022年12月）

2022年12月3日 天候：くもり 調査者1名

昆虫観察の時期は終わりました。紅葉の時期も終わりました。くもり空の寂しさがブナ林全体を覆っている感じがします。右の写真のカヤランも、来年の春を待っているでしょう。鳥見の人たちも暇そうでした。



チョウ目 チョウ類0種

チョウ類は全く確認できませんでした。カ類では、キノコヒモミシガの幼虫を2個体確認できただけでした。その他、種類の分からないコケガ類の幼虫の死体が、樹幹に張り付いていました。



キノコヒモミシガ幼虫

バッタ目

マダラスズとモリオカメコオロギの弱々しい鳴き声を聞きながら進むと、舗装道の脇からヒロバネヒナバッタのオスが飛び出しました。



ヒロバネヒナバッタ

カメムシ目

カメムシ目は成虫越冬する種が多いので期待していましたが、卵越冬するクヌギカメムシ属のメスを1個体見ただけでした。腹が膨れていたため、これから産卵するのだと思います。



クヌギカメムシ属

その他

シダクロスズメバチを、昨年と同じ場所で同じ月に見ました。昨年より個体数は少なく、2個体だけでした。近くに巣があるのかもしれませんが。その他、クサカゲロウ科の幼虫を1個体確認しました。



シダクロスズメバチ

付図7（左上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年10月）

付図8（右上）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年11月）

付図9（左下）. 和泉葛城山昆虫調査速報（2022年12月）